ＩＳ　～黒一点～

紫帆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　～黒一点～

【Ｎコード】
Ｎ９４９７Ｗ

【作者名】
紫帆

【あらすじ】
この作品は織斑千冬に少し歳の離れた兄がいたらという妄想をこれでもかと詰め込んだ作品です。
二人の妹のために働く鈍感系な長兄の十秋と、お兄ちゃん大好きなツンデレ・クーデレを使い分ける器用な長姉の千冬。そして妙に大人びて素直でクールな末妹のマドカ。
その三人が送るハーレムストーリーが今ここに開幕。

第一話（前書き）

更新は不定期ですがよろしくおねがいします

第一話

「十秋兄（とあきにい）、十秋兄。はぁ……。そろそろ起きなければ遅刻するぞ？　初出勤なのだろう？」

「ん……ああ、そういえばそうだったな。まだ時差に慣れてねぇんだよ……」

アメリカから日本に帰って来てまだ二週間しか経ってねぇんだぞ？　そう簡単に時差ボケが直るわけないじゃん。

……ん？　それは異常？　そんなこと言われても、直らないもんは直らないんだから仕方ないだろ。

だから朝から妹に起こしてもらうなんてイベントは堪能したくても出来ねぇよ。

ちなみに十秋（とあき）っていうのは私の名前だ。女名だが立派な男だぞ？　元来名前は記号でしかないからな。女性名と男性名を区別することがおかしいのだ。

「向こうでもどうせ昼夜逆転の生活をしていたのではないか？　もう少ししっかりとしたらどうだ」

「お前はもっとだらしない生活をしろ。そうじゃねぇと俺――私が帰って来た意味がないだろうが」

「全員がだらしない生活をしたらここの家計が崩壊するぞ？」

「いや、だから私がちゃんとするから問題ないと言っているだろう。今日から社会人なんだから、それくらいはやってみせる」

社会人になるから一人称を『俺』から『私』にしようと思ってるんだが、やっぱり家族の前だと素が出ちまうもんだ。

それと今日から社会人で初出勤とは言うが、何度か職場には行かせてもらってるよ。

荷物やらを運ばないといけないからな。

「どうだか……。そういえば聞いていなかったが、十秋兄はどんな仕事をするんだ？」

「ふん、内緒だ」

「そう言っておきながら実は働かずに私と円夏（マドカ）が学校に行っている間にニート生活を堪能、などと考えてはおるまいな？」

「お前は実兄を侮り過ぎだろう、千冬。お前や円夏を養わなければならないんだから勤め先くらい決まってる」

妹は私をどういう風に捉えてるんだろうか。

一生遊ぶだけの金があれば両手をあげてニートになるが、切りつめて生活していかなければならない状況でニートなんか出来るかよ。

アメリカでもちゃんと働いてたんだぞ、大学に通いながら。

「それではなぜ職場を教えないんだ？　疾しいことがあるからではないのか？」

「しつこい女は嫌われるぜ？」

「なっ！？　十秋兄は実妹のことをどうしてそう悪く言えるのか理解に苦しむな」

「私も実兄のことをどうして信用できないのか理解に苦しむよ」

さっきから人のことをニートやらなんだと言っていたヤツがいう言葉か、それは。

嫌われるのなんてニートに比べればまだマシな方だろう。

ニートはそれだけで嫌われ者なんだから、寛大になってくれても罰は当たらん気がするよ

「それは十秋兄が悪いのだろう。信用されないような生活をこの一週間送って来た人の台詞とは到底思えんな」

「もっともっと昔に遡ってくれよ。あの人達がいたころは信用の塊みたいだったじゃねぇか」

「……あの人たちの話題は出来るだけ避けてくれ。円夏に聞かれたらどうするつもりだ？」

「あー……すまん。お前は嫌いだったな。そう気分を害すな、善処するから」

あの人たちっていうのは、私たちの親にあたる人達のことだな。

私がアメリカの大学に行っている間に夫婦の二人だけでどこかに行っちまったらしい。

無責任な親だとは思うが、産んでもらった恩はあるし、私一人だけを残さずに妹二人を残してくれたことは感謝してる。

だから好きではないにしろ、嫌いにはなれそうもない。

「この話はもうやめにしよう……。ところで十秋兄、早く起きて朝食の用意をしてくれないか？　そろそろ時間的にも肉体的にも限界

が来るのだが」

「それもそうだな。つーか空腹くらい我慢しろよ。いや、それより女なんだからもっと家庭的になったらどうだ？」

「……喧嘩を売っているなら買うぞ、十秋兄」

「嘘です。スイマセンデシタ」

「はあ……。わかったなら早く準備をしてくれ。私は円夏を起こしてくる」

妹怖ぇえええええ！
なんで千冬はいつもあんなに暴力的かな。
言葉に棘があるからね。余計怖い。
射殺す様な視線ってああいうことを言うんだろうな。

……おっと、いつまでもこんなこと考えてたらまたあの妹という皮を被った鬼が出てくるかもしれないから、適当に朝食の準備を済ませるかね。
とはいってても鮭を塩焼きにして、昨日から作っておいた味噌汁をよそって、冷蔵庫から漬け物を出し、炊きたてのご飯をよそうだけでおしまいなんだけどな。
こんなことすら出来ない千冬の家庭スキルの無さには最早感服する他ねぇよ。
その漢らしさに惚れ惚れするね。

「十秋兄、今なにか失礼なことを考えなかったか？」

「おおう、我が最愛の妹よ。私がそんなことを考えるわけがないだ

ろ？　つーか早いな」

「なに、起こすだけだからな。十秋兄とは違って円夏はいい子なんだ」

私だっていい子だよ？
もう『子』というほどの歳でもないけれど。
でも中学・高校・大学と飛び級で卒業したから、満年齢18でまだまだいける可能性もあるっちゃあるな。

「それと最愛と言ったが……その、だな。んん！　円夏より私の方を愛していると、そういう解釈で問題ないのか……？」

「どっちも一番だっつの。千冬も円夏もかわいい妹なんだから、順番なんて付けねぇよ。変なことで張り合おうとするな」

いきなり顔を赤くしたかと思ったらそんなことか。怒られるかと思ったじゃねぇか。
私はコイツらを置いてアメリカに行っていたからてっきり嫌われているかと思ったんだが、そうでもなかったっぽいな。

「変なことだと……？　私にとってはとても重要なことなのだが。それに『最愛』と順列を先に付けたのは十秋兄だろう」

「ああ、悪かったよ。お前も円夏も愛してるから心配すんな」

もちろん、家族としてな。

「あ、あい、あい……！　そういうことを軽々と口にするな！　そ、それに私たちは兄妹だぞ!？　それは禁断の愛……ああ、いや十秋

兄が望むのならそれも……」

なんか千冬がぶっ壊れ始めたが、昔からなにかと私と一緒にいることが多かったお兄ちゃんっ子だからあんまり気にしなくていいぞ。私も千冬からこうやって言われることは割と慣れてるから。

「姉さん、どうかしたんですか？　顔が赤いですよ？」

おっと、ようやく私のかわいい妹の二人目の登場だな。

今まではずっと円夏（マドカ）表記だったけど、これからは『マドカ』で行こうと思う。

そっちの方がわかり易いしな。

「マドカは気にしなくていいぞ。昔からこんな感じだったから。そんなことより早く朝飯食わないと遅れるぞ」

「あっ、はい。おはようございます、兄さん。いつも御苦労さまです」

「いやいや、気にしなくてもいいぞ。これも仕事の内だし、やりたくてやってるわけだからな。お前らの美味そうに食べる表情が見られるなら安いもんさ」

「兄さんは罪な人ですね。そうやって甘い言葉をかけて数々の女性を落としたのですか？」

「小学生の頃からそんなことは憶えなくていい。ほら、早く飯食え」

誰が数々の女を落としてきたんだよ。

これくらいは人として普通のことだから、こんなことで惚れるヤツ

なんているはずがないだろう。
それに私の顔はマドカや千冬と違って美形のそれではないと思っているからな。
つーか、マドカはどこでそんな言葉を憶えて来たんだよ。この間小学生になったばかりなのに、妙に大人びてやがる。

「ふふっ、照れ隠しですか？　兄さんも若干ですが顔が赤くなっていますよ？　頼りになるだけではなく、かわいらしい一面もあるのですね」

千冬はマドカにどんな教育をしやがったんだ。
小学生にからかわれる社会人とか哀れにもほどがあるぞ。
私の体裁も少しくらい考えてほしいな。
……え？　マドカの方が大人に見えて社会人らしい？
そんなの言われなくてもわかってるけど、そこら辺は兄としてしっかりしたいじゃないか。

「はあ……。千冬もいつまでも立ってないで飯食えよ」

「そうですよ、姉さん。姉さんが席に着かなければ私も兄さんも食事を開始することが出来ないのですから早急にお願いします」

「あ、ああ、すまない。しかし……ふふふっ、あの言葉はいい響きだったな……」

コイツが小学生の前で妖艶な声を出すのがマドカが大人びる原因かもしれんな。

「あの言葉？　兄さんはまた姉さんに甘い言葉をかけたのですか？
やれやれ、一人だけならず、二人の妹を同時に攻略しようという

わけですか。私は構いませんが、兄さんは地獄を見ることになるかもしれませんよ？」

「攻略もしないし地獄も見ないから。つーか、妹を恋愛対象みたいに言うな」

「少なくともわたした――」

「マドカ。余計なことは言わなくていい」

「そうですね。兄さんが変になられると困りますし、言わない方がいいですね」

なんか急に千冬がまともに戻ったんだが、そんなに聞かれたくないことだったのか？

まあ、そういうことなら言及はしないけど、家族間で隠し事っていうのは家庭崩壊の原因になり兼ねないから避けたい。

「「「いただきます」」」

でも性格は三者三様だが、こうやって息がぴったりな俺たちなら心配は必要ないだろ。

第二話

「もう7時半か……」

「もう？　どちらかといえばまだだろう？　いつ行くかわからなかったから早く起こしたが、そんなに早く行かなければならないのか？」

その早い時間帯にお腹が空いたと言ったのはどこのどいつかな。

「仕事は9時半からなんだけど挨拶とかもあるんだよ」

「早めに行かなければ上司の方から『ハハハ、初出勤が社長出勤とは随分な御身分だな』と虐められるんですね」

「いや、それはないけど……」

だからどこでそんな言葉を教わったんだ。

しかももの真似が妙に上手く、厭味ったらしいのがちょっぴりイラッとするね。

「そこで疑問なのですが、どうして社長は遅く出勤してもいいのですか？　社長だからサボって良い理由にはならないと思うのです。むしろ社長なのですから早く来て社員を迎えて引っ張るくらいの精神を持たなければ務まるとは思えません」

「子供はそんなことを気にしなくていいんだよ、マドカ」

「……十秋兄、答えられないなら素直にそう言えばどうだ？　変に見栄を張ると恥をかくぞ？」

「そうなのですか？　兄さんなら知っていると思って聞いたのですが。それは……残念です……」

うわあっ！？

私はなにも悪くないのにマドカにシュンとされた！？

千冬も私の方をジトっとした目で見てくるし……わからないものはわからないんだよ。

「語源が不明だからね。明確に答えられる人の数の方が少ないと思うよ」

社長は偉いから遅刻していいというのも説得力がないしな。

経営者は自分の出勤時間を決められるというのが一番近いところなんだろうが、それもなんとなく違う気がする。

「そうなんですか。それなら仕方ないですね」

「上手く逃げたな」

「人聞きの悪いことを言うな。それよりお前たちも早くご飯を食べて学校に行きなさい」

人を信じることは大切だよ、千冬。

私は向こうに行ってからそれをよ～く教えられたよ。

性格の豹変する暴力な女子にね。

「兄さんはもう行くのですか？　もう少し朝の時間を堪能したいのですが」

「そうだぞ。私はいいが、マドカのことも考えてやってくれ。私のことはいいんだぞ？　ただ、マドカのことをもっと考えてほしいのだ。わかったな？」

千冬のことも気にした方が良いんだね、わかります。

「姉さん、もう少し素直になったらどうです？」

「わ、私はいつでも素直だ！　うん、素直に違いないな」

「そうか。それならマドカのためにあと3分だけ談笑するとしよう。マドカと」

千冬は素直って言ってるし、私が構わないほうがいいのだろう。変に構って嫌われるというのはイヤだからな。

「どうしてそこに私が含まれていないのだ！」

「え？　だって千冬がそう言ったんじゃないか」

それなのになんで私が怒られているんだ？

「そ、それは……」

「兄さん。姉さんはいわゆるツン――」

「わあっ!？　言わなくていい！　マドカはいちいちそんなことを

言わなくていぃい！」

千冬は朝から元気だなぁ。
ここまで必死になるって言うことは聞かれたくないことに違いない。
それなら私は聞かないぞ。

「はぁ……はぁ……。十秋兄のせいで疲れたな……」

「お前のその言い分は酷く理不尽だぞ」

「わたしは八割兄さんの責任だと思いますよ。これだけやって気付かないのは些かおかしいです」

うむ、私は小学生の妹にまでおかしいという烙印を押されてしまったらしい。
それはいいんだが、そんな憐れむ様な目で見ないで？

「それより早く行かなくていいのか？　これ以上この問答を続けて体力を浪費したら私が倒れてしまう」

「それもそうだな。それじゃあ行ってくるよ」

私はただ座って話を聞き流していただけだから、体力は一切使っていないよ。
それにしてもさっきはマドカのためにいろと言ったくせに、今度は自分のために出て行けとは、私は本当に千冬に嫌われているのではないか？
態度も尖がっている様な気もするし……。
いや、ダメだダメだ。これから新しい生活が始まるのだから、こんなネガティブになってはいけない。

「行ってらっしゃい、兄さん」

「頑張って来い、十秋兄」

「千冬はマドカのことをよろしくな。マドカは学校ではちゃんと先生の言うことを聞いていい子でいるんだぞ？」

「心配しなくても大丈夫ですよ。友達もできましたので」

「まったく、その心配性は昔から変わらないのだな。気に掛けてくれるのは……う、嬉しいがな」

そんなこと言われたってかわいい妹なんだから心配するのは当然だろ？

妹を守ってやるのが兄としての本分なんだし、むしろそれくらいはさせてくれ。

「うん、それじゃあ二人とも頑張るんだぞ。それじゃあ行ってきます！」

私がしっかりと働いて二人には楽をさせてやらないといけないんだし、骨身を削って頑張るぞ。

いざ、職場へ行かん！

「え～っと……おはようございます。これから一年間よろしくお願

いしますね？」

『…………』

はうっ！
私の精神に１００のダメージ！　……ではなくて。
今の挨拶ではなにか問題あったのかな？　いや、あったから無視をされているのか。
みなさんが私を射殺す様な視線で見てるのはきっとこっちに不備があったからに違いない。
もう一度。もう一度しっかりと挨拶をすればみんな反応してくれる筈！

「おはようございます！　今日からみなさんの担任になる織斑十秋です！　よろしくお願いします！」

よしっ！　これで完璧！
着任式とかすっごい緊張してしどろもどろにしか喋れなかったけどこれなら非の打ちどころがないな。

「せ、先生……？」

「いや、歳とかそんなに変わらなそうだし、絶対生徒だよ」

「それじゃあ今のはなに？　ジョーク？　寒くない？　しかもスーツまで着てるし。それなら本当の担任は？」

うわぁ、いきなり酷い言われようだな。
少し覚悟はしていたんだが、ここまで露骨だと軽くショックを受けるよ。

校長もいきなり新入生の担任なんて荷の重い役を押し付けないでほしい。

「わ、私があなたたちの担任ですからっ！　信じないと先生は怒りますからね！？」

な、なんでそんなに冷たい目線を向けるのさ！
うわぁ、それは流石に痛い。っていうかむしろ私たちより年下の様な……みたいな目で見るな！
くっ……ここはどうすればいい！？

1、　泣く
2、　素で一人称『俺』を復活させて黙らせる
3、　逃げる
4、　助け船を出してもらう

1は無様だから却下。
2はこれからの関係に支障が出そうだからやりたくない。
3も1と同様に無様だし、職務放棄はいけないと思います。
だとすれば4しかないのだが……どこに出せばいいんだ？
まだ生徒名簿すら見ていないという担任としてあるまじき職務放棄を行っている私にとって死角しかないぞ！？

「ちふ……ゆ……？」

間違いない。
俯いてこっちを見ない様にしているが、あの独特の雰囲気は間違いなく千冬だ。
私が名前を呼んでそっちを向いたせいで千冬に興味の視線が一気に注がれたが、そこら辺は気にしたら負け。

「あ、あそこの彼女の兄なんですすよ、私！　ハハハ、そうだろう、織斑千冬さん？」

「…………………」

飽く迄寡黙を突き通すんですね、わかります。
私も立場が逆だったら絶対にそうしてるよ。

「兄……？　いや、姉なんじゃ……」

おおう、まさか性別を間違えられるとは思わなんだ。
これでも身長は170あるし、ごつくはないにしろちゃんと鍛えて引き締まっているから男っぽく見える筈なんだけどなぁ。
髪は理事長が『そのままで！　是非にそのままで！　切ったら解任！』とか言うから伸ばしたままだし、千冬に似てるから間違われても仕方ないのか？
いや、それ以前になんだよここの理事長。どんな理由で私を雇ったんだ。私立なのは知っているが、そんな適当でいいのか？

「私は男ですよ。声変りはあまりしてませんが、喉仏がちゃんとありますから」

「ほ、ホントだ……」

「かわいいと思ってしまった俺たちって一体……」

なんか男子連中が嘆いているみたいだけど気にしたら負け。
うん、でもこれで信じてもらえたみたいだね。

「改めて自己紹介をします。私は織斑十秋。満年齢18。性別は男。初任で至らない点があると思いますが、これからどうぞよろしくお願いします」

これから私の教師生活、はじまります！

第三話

「どういうことだ十秋兄！」

「ここでは織斑先生と呼びなさい」

「はい、織斑先生――ではなくて！　どうしてここにいるんだ！」

「お前が働けと言ったんだろう？」

「ああ、もう！　そうではない！　なぜここで教師などしているのかと聞いているんだ！」

一時間目の授業が終わって――私は英語の先生で、一時間目が英語だった――いざ職員室に帰ろうかと教室を出たら千冬に捕まってしまった。

なんでそんなに興奮しているんだよ。

「なぜと言われてもなぁ。教員免許を取ったから、その序で？」

「なんでそんなに適当なんだ……」

公務員って収入安定してるし、保護者の体裁を気にする子供にとってはいい職業なんだよ。

自分の保護者がガテン系の職業だったらなんとなくイヤだしね。

カッコいいとは思うけど、それは他人だからこそだよ。

「まあまあ。それより織斑さん、友達は出来たかい？　先生は孤立しないか心配なんだ」

「妹をどういう風に見れば友達が出来ないと思えるのか不思議だな」

真っ当に見た結果がそれなんですがね。

千冬は昔から友達が少なかったから。

「ということは友達が出来たのか？　本当か！？」

「うっ、友達というか――――」

「ちーちゃんちーちゃん！　いきなり教室飛び出してどこに行くかと思ったよ～！　寂しかったんだよ？　一人にしないで？」

「その呼び方で呼ぶな！　そしてくっつくな、馬鹿者！」

「あん！　そんな冷たいちーちゃんも好きだよっ！」

「だからやめろと言っているだろうが！」

頭にうさ耳を装着した子が千冬に抱きついたっていうことはこれが千冬のいう友達か？

ちーちゃんなんて呼ばれて、仲睦まじいじゃないか。

「よかったな、千冬」

「この何処を見て良かったと言えるのだ」

「えっと……篠ノ之さんだったかな？　千冬のことをよろしく頼む

よ」

「…………」

「私のことは無視か……」

無視ですね、わかります。
いやいや、待て待て。それはおかしいだろう。
仮にも教師なんだから少しくらいアクションを起こしてくれませんかね？

「コラ、私の兄を無視するな。十秋兄――織斑先生は悪い人ではない。というかむしろ良い人だぞ」

「あー……いや、いいんだ。篠ノ之さんが話したくないならそれで構わないよ。ただ、うちの妹と仲良くしてやってくれれば嬉しい。知っての通り、うちの妹は昔から人付き合いが苦手で友達が少なくてね。そうやって親しくしてくれる人はいなかったんだ。だから……うん、ずっと友達でいてやってくれ」

「いらないことは言わなくていいと言っているだろう！」

「ははっ。それじゃあよろしく」

千冬の友達と――というか生徒と――仲良くなれないと言うのは非常に残念だが、あちら側が拒否しているなら無理に近寄る必要もないだろう。
ちょっとずつでも縮まればそれでいいさ。
築城三年落城三日というしね。
……いや、落城させる気は毛頭ないけれど。

「まったく、人の話は平気で聞き流す癖に、よく教師になどなろうと思ったものだな……」

「そうかな？　大事なことは全部聞いてたと思うよ？」

「……なんだ？　興味でも湧いたか？」

「にゃふふ～！　ちょっと変な人だなって思っただけだよ」

「それは結構だが……人の兄を変だと言うのは頂けんな」

「あっ、やめっ！　にゃあああああああ！」

後ろから悲鳴が聞こえた気がしたけど、千冬の愛情表現（アイアンクロー）でもくらったんだけだろうから気にしなくても大丈夫。

そんなことより早く職員室に戻ってコーヒーでも飲もうかな。

「新任で、しかもその歳で担任を持つというのも大変だろ？」

「あっ、山田先生。お疲れ様です。私はべつにそんなんでもないですよ。歳が近いですし、彼らの考えることはよくわかりますから」

「そんなもんか。お前もまだガキだからな」

「ババアがなに言ってやがるんですか」

「相変わらずムカつくな……。仮にも年上だぞ？　敬意を払おうとは思えないのかよー」

「クズに払う敬意なんて持ち合わせていないんで」

「お前はそんなのでよく通ったな」

「あなたも同じようなもんでしょう」

「くっ……」

いや、そこは言い返して来ないと自分がクズだと認めることになるぞ？

さっきから私の隣の席でペラペラと男言葉で喋ってくるのは俺より４つ上の同僚の女教師、山田真奈という人物だ。

童顔メガネっ子で巨乳なのに男言葉とかいろいろ突っ込みたいことはあるが、コイツはアホなので突っ込んだら負け。

「それよりアキ、今日は久し振りに飲みにいこーぜ」

「朝から仕事が終わった後のことを考えるのはどうなんですかね。もっと生徒のことを考えてあげてくださいよ。ただでさえわかりにくい授業を受けさせてるんですから」

そもそも私は未成年だ。

「お前はホントに厭味なヤツだな」

「事実ですから」

「ムカつくー！」

「あんまり職員室で騒がないでもらえますか？　私まで白い目で見られるじゃないですか」

女なんだからせめて女らしく静かにしてくれ。
しかも耳元でギャンギャン喚くからうるさい。

「お前なんか白い目で見られればいいんだよー。バーカバーカ！」

「ガキかよ……。そんなのでよく教師になれたな」

教員免許はともかく、こんな変人を採用する学校なんて早々ないぞ。

「ここの理事長の趣味らしいぞ。オッサンは愛すべき変態だったなー」

「ああ、あの人か……」

類は友を呼ぶってやつだろうな。
変態同士は仲良くできるもんなのか。

「さて、それじゃあ次の授業があるんで私は失礼します」

「あっ、そういえばあたしも次は授業だった。あんたのクラスだけど、問題児とかいないだろうな？」

「あんたが一番の問題児だよ」

「そっかー。それなら大丈夫だな！　行ってくるよ！」

なにが大丈夫なんだ……？

むしろ不安要素がいっぱいじゃねぇか。

まあ、気にしたら負けだな。

第四話

「わぁ～ん！　アキ～！　あんたのクラスの生徒があたしを虐める～！」

「近寄らないでくださいブス」

「なっ!?　容姿端麗、学業優秀。さわやか笑顔でみんなの心に幸せ運ぶこのあたしにブスとはなんだブスとはぁ！」

「その汚い心をブスというんです」

職員室に帰ってきた瞬間に泣きついて来るなよ、めんどくさい。この人にはここが職員室の中だということに自覚はないんだろうか。ほら、なんか私が白い目で睨まれているからやめてくれよ。この歳で教師をやっているだけで妬みの対象なのに、例えババア――私から見たらそうだが、他から見れば若い娘――でも周りをうろちょろされると更に妬まれるじゃないか。

「それで、ブスだということは再認識しましたが、うちのクラスがどうかしたんですか？　あなたのその汚いレンズを通して見た生徒の悪口を言われても困るんですが」

「ぶー。どうせブスですよー、だ」

「……殴って良いですか？」

「今は慰めるところでしょーがっ！」

「すいません。無性にムカついたので」

いやぁ、唇を尖らせて拗ねたら殴って良いという合図だと昔に教わった気がするんだけどなぁ。ただ、真奈に限るとも言われたが。

「はあ……もういいわ。それよりあんたのクラスの生徒はおかしいぞ！」

「それはあなたの頭じゃないんですか？」

「だ〜か〜ら〜！　なんだっけ？　あの、しのののの――――」

ゴンッ！

「いったぁ！　なにするんだよー！」

「生徒を名指しして悪口を言わないでください。殴りますよ？」

「もう殴ったけど！？」

コイツは教師失格だな。

今のところどちらに非があるかはわからないけど、それでも生徒の悪口を言うのは教師としてあるまじき行為だろう。

いっそやめてくれればいいのに。

「それで、篠ノ之さんがどうかしたんですか？　愚痴なら聞きませんが、相談なら聞きますよ」

「それがさぁ、あたしのことを完璧に無視するんだよね」

「自分に非があるのでは？」

「いや、新任だよ？　初任だよ？　初対面だよ？　ある方がおかしいって」

まあ、私も非がないのに無視されたからそこら辺は深く追求は出来ないな。

重度の人見知りとか、そういうのなら仕方ないよ。

「……で？」

「へ？　それだけだけど？」

コイツには人の神経を逆撫でる才能があるらしい。

人が親身に相談に乗ってやろうと思ったら、結局ただの愚痴じゃないか。

「はあ……山田先生はふざけてるんですか？　その程度で泣きつかないでください。ババアに泣きつかれるこっちの身にもなってくださいよ」

「こっちにはアキしか頼るヤツがいないんだよー。一人ぼっちなんだよー」

「そうですか。それなら勝手に孤独死してください」

人の腕を掴んで振り回すなよ、だるいから。

「あんたそんなんじゃ彼女出来ないぞー？」

「22歳独身のあなたに言われたくありません。私はまだ十代なので」

「あたしに彼氏が出来ないのはあれだよ。えっと……」

「ブスだから」

「そう！　ブスだから――――って違う！　あたしがあまりにも綺麗だから近寄ってくる男子がいないんだよ！」

なんだ、心がブスだからじゃないのか。

てっきりそれでずっと彼氏がいないのかと思っていたが違うんだな。

「それは良かったじゃないですか。待っていれば異性が寄ってくると思って8年。あなたは立派に独身三十路街道をまっしぐらなわけですね、わかります」

「コラァ！　人の未来を勝手に決めるな！　それにあんただって彼女いない歴イコール年齢だろー？　人のこと言えない癖に」

コイツは人の気にしていることをそうやってすぐ口に出す。

私も同じようなものだが、それはこのアホに対してしかやらないからセーフでしょ。

「私はいいんですよ、十代ですから」

「知ってるか？　男のチェリーはステータスにならないんだぜ？」

「三十路のチェリーも変わらないでしょう」

「あたしは未だ二十代前半だっての！」

そんなこと耳元で大声で言わなくてもわかってるよ。っていうか話の流れでポンと口に出してしまったが、これはまずいことを聞いてしまったな。

周囲の若い男性教諭の目がギラリと光ったのを見逃せるはずがない。まあ、目の前のアホは大して気にしていない様だからどうでもいいか。自己責任だしな。

「話を戻しますね。実を言うと、篠ノ之さんには私も手を焼いていましてね」

「無視された？　無視されたんだ！？　仲間だー！　人のこと言えないじゃん！」

「ウザいんで黙ってください」

そしてことあるごとに俺の手を掴むな。

「まあ、否定はしませんけどね。妹の言い分を聞く限りでは妹としか話さないみたいなんですよ。出来ればクラスのみんなと仲良くなってほしいんですが」

「もう既に孤立しちゃってるわけだ。担任っていうのも大変だな。……ん？　妹？　あの織斑ってあんたの妹？」

「そうですがなにか？」

「顔は似てるけど雰囲気は全然似てないよな。あの子もピリピリしてて気まずかったよー」

千冬は人づきあいが苦手といっても初対面の人を敬遠するようなヤツじゃないし、なにかがあったんだろう。
千冬を怒らせるようななにかをコイツがしたか、それとも他人がしたのかはわからんが、まあ、家に帰ってからでも聞かせてもらうか。

「妹と言えばあたしにも妹がいるんだよ！」

「へえ、そうなんですか。あなたの妹ということは、さぞかし変な子なんでしょうね」

「お前な……。あたしで判断するなよなー。妹はいい子なんだぞ！？」

それ以外のなにで判断すればいいか私にはわからないから目の前のアホで判断させてもらったわけなんですがね。
むしろ他に判断材料はないだろう。

「まあ、悪いところを全部姉が持っていってるからいい子という可能性もありますね」

「この口がそんなことを言うのかな〜？」

「触んな、やめろ」

「トーン低い！？　ガチ拒否！？」

「すいません。あまりの鬱陶しさに素が出ました」

年上だから、仲が良いからといってなんでもしていいわけじゃないだろ？
童顔眼鏡巨乳にほっぺたを引っ張られて喜ぶヤツがどこにいるんだよ。
……あれ？　外見だけなら結構いそうだな。
「コホンっ！　で、その妹さんがどうかしたんですか？」
「今のは予想以上に傷付いた……」
「……で？」
「慰めてくれって言ってるんだよ！　バーカバーカ！　女心のわからない鈍感野郎！」
だから耳元で騒ぐなと何度言えばわかるんだ。
つーかこの人のボキャブラリィ少なすぎないか？　馬鹿とか単純な言葉でしか罵られてないぞ。
「それなら最初からそう言えばいいじゃないですか」
「……言ったら慰めてくれるのか？」
「そんなわけないじゃないですか。それに女心って……あなたは男でしょう？」
「ヒデェ！　それはいっちゃダメなことだったのに！　あーあ！　あーあ！？　知らないよ！？　あたしが死んじゃっても知らないからな！？」

「どうぞご自由に」

「うわ〜ん！　だから止めろよ〜！」

結局最後は折れて泣きついて来るのかよ。

「私が珍しくあなたの意見を尊重してあげてるんですから文句言わないでください」

「なんでそんな無駄なときだけ優しいんだよ……」

「そんなのあなたに消えてほしいからに決まってるじゃないですか」

「満面の笑みで言われた！？」

出来れば目の前から即座に消えてほしいんだよ。
いなかったらいないかったで寂しいとか、そういうのは絶対にない。

「まったく、アキはあたしのことをなんだと思ってるんだよ」

「馬鹿のできる友人」

「そうだよなー。あたしなんか虫だよなー……――――って馬鹿のできる友人！？」

いや、流石にそれは自分を卑下し過ぎだろ。
というかそんなに驚くことなのか？　普通のことを言った気がするのだけど。

「だ、大丈夫か……？」

「なにがですか？」

「いや、アキが素直にそんなことを言うなんてなにかの病気でもない限り有り得ないだろ？　熱でもあるんじゃないのか？」

「失礼なことを言わないでください。それとも虫と罵られたかったんですか？　私だって言っていいことと悪いことの区別くらい出来ますよ。親しき仲にも礼儀ありというでしょう」

ここが職員室でなければ虫と罵っていたかもしれないけど。

さて、そろそろ次の授業が始まる時間だし、私もさっさと行きましょうかね。

「私は授業に行きますから、勝手に机とか弄らないでくださいね」

「わかってるって。変なものを隠してないか確認するだけだから」

「はあ……」

「いってらっしゃ～いっ！」

呑気に手を振りやがって、私が帰って来たときにコーヒーを用意するくらいの謝罪をしていなければ一発殴ろう。

第五話

「それじゃあ私はこれで失礼します」

「飲み行くって約束忘れたのかー？」

「あなたが勝手に決めただけでしょう。私は了解なんてしてません」

「そう硬いこと言うなって。ほらほら、うちの妹にお酌させてやるからさ」

「未成年に飲酒を勧めるのは犯罪だと知っていますよね？」

「大丈夫だってぇ！　いいだろ～？　寂しいんだよ～！」

相も変わらずウザいな……。

家で待つ妹に早く会うために帰りたいという気持ちがこのアホにはわからないのか。

仮にも同じ妹を持つ人間のくせに。

「寂しいって……22年間耐えて来たんですから、後生もなんとか耐えられますよ」

「無理。正直に言うけど無理だって。人間一人じゃ生きていけないっていうしなー。だからお願い？」

ぶりっ子みたいな声を出されて一瞬殺意が湧いたが、ここで衝動的

に行動するほど私もバカではない。

ゴンッ！

「いたぁ！」

前言撤回。

体が勝手に制裁を与えてしまった。

「すいません。もう一発いいですか？」

「まだやる気か！？　あんたはホントに容赦ないなー。仮にも女子だぞ？」

そこは自信持てよ。自分で仮にもとか言ってたらホントに彼氏出来なくなるぞ。

「あなたの性別はどうでもいいんですが、もう帰って良いですか？　早く帰りたいんですけど」

「まあまあ、落ちつけって。ここはあたしの顔を立てるためにもうちに飲みに来てくれ！」

「……日本語が伝わらないんですか？」

「だってさ……。妹が『お姉ちゃん友達いないの？』とか言ってくるんだよ？　姉としては安心させてやりたいじゃん。だからあんたをうちに連れてきて妹に見せびらかそうかなーって思ったんだよ」

やっぱり日本語が通じてないみたいだな。

勝手にわけのわからん家庭事情を語り始めやがったよ。
「つまり友達と偽装した他人の私を連れて妹に嘘をつこうと、そういうことですね？」
「そうそう、他人のあんたを――ってさっき友達って言ってくれたよね！？　なにその掌返し！　マジでビビるよ！　しかも騙すとか人聞き悪いからやめろ！」
「だから本当のことだと言ってるじゃないですか」
「だよなー。本当のこと――ってだから冗談だろ！？　そこは冗談だろ！？」
二回も言わなくても聞こえてるって。
べつにいちいち乗っかってくれなくても私はギャンギャン騒ぐコイツを見ているだけでかなり楽しいんだが。
まあ、五月蝿いとは思うけど。
「冗談ですってば。それに、べつに今日じゃなくてもいいでしょう？　私は帰って家事もしないといけないんですよ」
「家事？　そんなの妹に丸投げしてればいいだろー？」
「あなたって人は……それだから彼氏が出来ないんですよ。家事くらい自分でしましょうよ。もう立派なババアなんですから」
仕事以外は家族に丸投げとかホントに最低だな。
親の仕事の都合上今は妹と二人きりだと昼飯のときに聞いたが、それは流石にダメだろう。

うちの場合は千冬が家事がダメという部分もあるが、それでも年長として少しくらいは手伝う意志を見せろよ。

「だからぁあたしはまだピチピチの二十代前半だって！　誰が老け込んだ三十路ババアじゃ！」

「……それで、妹に迷惑ばっかり掛けてあなたはなにもしてないんですか？」

「スルーされた！？」

「……………」

「え〜……ゴホンっ！　あたしは外に出て働いてるからべつにいいかなぁ、と」

典型的なダメなヤツの思考形態じゃねぇか。
そんな風に考えてるといずれ家庭が崩壊するぞ。

「そんなんだから友達がいないとか思われるんじゃないですか？」

「そうなんだよー。わかってはいるんだけどなー。ほら、あたしってアグレッシブじゃん？」

攻撃的なのか？　結構受け身だと思うんだが。

「だから家事とかそういうのはやる気が起きなくてさー。出来るには出来るんだけど、やらないんだよ」

「出来ないですよね？」

「出来るって。信じろよなー。やれば出来る子だから」
逆を言えばやらないから出来ないんだろうが。
結局そう言うヤツは努力が出来ないことを言い訳してるだけなんだよ。

「それじゃあやればいいじゃないですか。作ろうとすれば友達もできますよ」

「……本当にそう思うか？」

「もちろん。記念すべき友達一号はそこら辺の男を捕まえましょう。そして今晩飲みに誘えば完璧です」

「それじゃあただの変態だろー！　しかも友達一号はアキだ！　二号はいない！」

このコミュニケーション障害者は本当になんで教師になんかなったんだよ。
反面教師にでもなろうと思ったのか？
私以外の友達が皆無とか人としてどうかと思うぞ。

「まあ、友達の作り方はおいおい考えていきましょう。それじゃあ私はこれで失礼します」

「あー！　待って待って。あんたは徒歩だろ？　あたしは車だから送って行ってやるよ」

「結構です」

「人の好意を無碍にするといけませんって教わらなかったのかー？」
「あなたからは悪意しか感じられないので。どうせそのまま自分の家に連れ込もうとか考えているんでしょう」
「そ、そんなことはないって！」
動揺しているのを見てその言葉を信じろというのは無理があるな。とりあえずジト目で睨もう。
「わ、わかったよ！　アキが運転すればいいんだろ！」
「そういうことなら遠慮せずに」
まったく、最初からそう言ってくれれば素直に乗車したのに。私ももう十八だから、車は持っていないにせよ普通免許くらいは取っているよ。
そういうことで真奈の軽に乗り込んだのはいいんだが……。
「なんでこんなに汚いんだよ。整理も出来ねぇのか？」
二十代前半の女子の車とは思えないほどにゴチャゴチャしてる。
まあ、ババアだからこんなものなのか。
「その変わり様はすごいよなー。さっきまでの敬語はどうしたんだよ」
「話を聞けよ、お前は。それにわざわざ二人きりのときに敬語を使う必要はないだろ。敬意を払う人間が近くにいるわけじゃねぇし」

「ここに一人年上のおねーさんがいるわよん？」

「年増のババアの間違いだろ」

「アキはそんなんだから彼女が出来ないんだぞ？」

「安心しろ。こんな態度をするのはあんたに対してだけだ」

誰に対してもこんな態度を取っていたら教師どころか社会に適合すら出来ないよ。

人に対して接し方を変えるのは基本中の基本だ。

それにしてもコイツに対しての態度だけ冷たすぎる気もするが、本人がそれを気に入っているからそれでいいんだろう。

私にはその気持ちは理解出来ないがね。

「それを聞いて安心したよ。特別ってことだろー？」

「……気楽でいいな、あんたは」

「ハッハッハ！　それがあたしのいところだからな！」

「はあ……行くぞ。シートベルトをしろ」

隣ではち切れんばかりの胸を更に張るアホは無視して、私は自分の家へと車を進めて、うちの前に着いた。

「送ってくれてどうも」

「親友の頼みだしこれくらいは任せろって」

親友と思ってるのはお前だけだ、とか言えばまた騒ぐだろうし、今言うのは無粋だろう。

「それじゃあ毎朝迎えに来い。歩くのは面倒なんだ」

マドカたちを送っていきたいのは山々だが、登校時間に差があり過ぎるから無理なんだよ。

新任だし、あんまり遅れていくわけにはいかないからな。

「オッケー。7時半過ぎにここでいいか？」

「いいのかよ……」

「その代わりに今度ちゃんとうちに飲みに来いよー？」

「わかってるっつの。じゃあな。気をつけて帰れよ」

「ほいほーい。またな」

やべ……成り行きで変なことになっちまった……。

まあ、なんとなる……よな？

第六話

さて、あいつも見送ったことだし、家の中に入るか。
そう思って玄関のある方を向いたんだが――――

「十秋兄、ずいぶんと楽しそうに話していたな」

「今のは兄さんの彼女ですか？　ガサツそうに見えたのですが、ああいうのが趣味なのでしょうか？」

流石私の妹、洞察力が鋭いな。
あの一瞬で真奈がガサツ――――雰囲気はそうだが、案外繊細だったりする（本人談）――――だと見破るとは。
しかしこの二人は何故怒気を纏っているんだろうか。

「笑わせないでくれ、二人とも。あれとはただの友人だ。あんなのと付き合うわけがないだろう」

あれと付き合えるヤツは最早勇者と呼んでも問題ないだろう。
それくらいには色気がない。知れば知るほど女として認識出来なくなるという驚異的な欠点を持っている彼女に彼氏が出来るとは到底思えない。
まあ、その安心感から友達としての付き合いがあるわけだけど。

「しかし山田先生は始終笑顔で十秋兄の顔を見ていたではないか」

「あれはいつでも笑顔だ。授業のときでもそうだったろう？」

「それはそうだったが……しかしそれとは何か違う様な……」
私といるときは妙に演技派で、無駄に多様な表情を見せてくるが、それは気の許せる友人が私だけだから。
「先生……授業……はい？　少し状況が飲みこめないのですが……」
「そういえばマドカには言ってなかったな。私は千冬の通う学校で教師をしているんだ」
ちょっと混乱するマドカがかわいくてそのままにしておきたくなるが、放置すれば嫌われるかもしれないのでそんなことはしない。
「ということは授業中も姉さんは兄さんと一緒にいられるということですか？」
「まあ、そうなるな」
「ずるいです姉さん！　私も兄さんといっしょにいたいです！」
「我が儘を言うな！　それに小学校とは違って高校は教科ごとに教師が変わって授業をするんだ。だから一日も会わない日だってあるんだ」
英語は週４であるし、担任だからイヤでも顔は合わせないといけないわけだけど。
それにしてもマドカが我が儘を言うのは珍しい――――というか、初めて聞いた。
向こうに行く前はそんな歳ではなかったし、こっちに帰って来てか

らも静かでいい子だったから意外だ。
……いや、これが普通なのか。
この歳で我が儘を言わない方がおかしいんだろう。

「まあまあ、千冬もそう言うな。マドカはまだ小さいんだから、それくらいは大目に見てやれ」

「むぅ。私がまるで悪者みたいではないか……」

そうやって落ち込まれると私が悪者みたいではないか。

「そうは言ってないだろ？　躾けることは大切だが、鞭ばかりじゃ子供は育たないもんだ。甘やかしすぎるのも良くないが、たまには甘やかすのもいいだろ。な、マドカ？」

「ありがとうございます。兄さんは優しいですね」

「いやいや、これくらいはな」

ああ、はにかむ小学生の妹かわいいなぁ。
千冬もこれくらい素直だったらかわいげがあるのだが。
私からすれば今でも十分かわいいとは思うが……将来、嫁の貰い手があるか不安でしょうがない。
外見だけなら言い寄ってくる男子は多く、その性格も受け入れられる人も多いだろう。
しかし私が認めない限りは嫁にはやらんよ。
シスコンなどではなく、単純な親心みたいなものだ。

「マドカ。その言い方だと私が優しくないみたいに聞こえるのだが」

「姉さんは厳しいですけど、それも私のためだとわかっているので仕方ないと納得しています」

「千冬……お前はもっと優しくしてやれ」

小学生にそんなことを言わせるのはどうかと思うぞ。

「わ、私は精いっぱいの愛情を注いでやっているつもりなのだが……！」

私の溜め息に対して狼狽する千冬を見て、マドカはくすりと声を漏らし、表情を緩ませる。

「姉さんの愛情はしっかりと感じていますよ。もちろん、優しい兄さんの愛情も」

「だってさ。良かったな」

「と、当然だ！　これでダメだというのならマドカの方がおかしいのだ」

強がっているが、心の中ではホッと胸を撫で下ろしているに違いない。

マドカもそれをわかってかこっちを見て楽しそうに微笑んでくる。

「さ、そろそろ家に入って晩飯の支度しないとな」

まだ夕方の六時だが、あまり遅くなり過ぎるのもまずいだろう。

千冬が朝みたいに急かしてきたらこっちはたまったもんじゃないんだよ。

「あっ、すいません、兄さん」

「私たちはこれから少し夕食の食材の買い物に行く予定だったんだ」

だから玄関から出てきていたのか。
しかし……冷蔵庫には今日の夕食の材料くらいはあった筈なのだが、気のせいだったか？

「それなら私も行くよ。二人だけでは大変だろ？」

「大丈夫だ。十秋兄は家の中で待っていてくれ」

「そうですよ、兄さん。たまにはゆっくりと休んでください。心配しなくても、必要のないものは買いませんから」

私はべつにそういうことを危惧して言っているわけではないんだがなぁ。
二人がそう言った瞬間に口元が歪に三日月を描いたのも気になる。

「……まあ、そういうことなら」

ついて行く気はない。
二人がせっかく休ませてくれるというんだから、それを素直に受け取るのも兄としての務めだろう。
帰って来たらどうせ私が料理を作らなければいけないのだから、その準備でもしながら待っておくか。

「それでは行ってきます」

「十秋兄はしっかりと休んでおくのだぞ？」

「何度も言われなくてもわかってる。気をつけて行って来い」

仲良く歩き始める姉妹に手を振り、姿が見えなくなるのを確認して家の中へと入っていく。

それはいい。それはいいんだが――

「なんだこれ……」

そこには今朝会ったうさ耳とマドカと同じくらいの小学生の女の子が鎮座しているという、そんな異彩を放っていた。

第七話

「「「…………」」」

自分の家だというのにいたたまれないのは何故だろう。
もしかしてここは私の家ではないのか？
いや、しかしここから千冬たちが出て来たし、確かに表札には『織斑』と書かれていた。
なのでここは私の家に違いない筈なのだが、なぜ我が物顔で見知らぬ少女が二人もリビングに居座っているのだろうか。
もしやなにかの衝撃で時限震が起き、その衝撃で時空が歪み、異世界へワープさせられた？
……別に厨二病を拗らせているわけではないのでそんなに白い目で見つめてくるのはやめてほしい。
コホン！
ともかく、ここは私の家なのに何故か少女二人が鎮座しており、私は彼女らと直立したまま見つめ合っているという、なんとも不思議な状態なのだ。

「あ、ああああ、あのののの……」

沈黙を破ったのは小さな少女なのだが、何故だかすっごい焦ってまともに呂律が回っていない。
とても微笑ましい光景なのだが、何故だか罪悪感が込み上げてくる。
仕方ない。ここは私が落ちつかせてやるか。

「大丈夫。ゆっくり、なにを話したいか頭で考えた後に口に出して

ごらん。私はそれまで待っていられるから」

近寄って肩に手を置いた瞬間に一瞬体をビクンと跳ねさせるが、その子はゆっくりと息を吸い、吐き出す。

「えっと……お邪魔してます？」

どうして疑問形なんだ？

「うん、まあ、私がここの家主に当たるのかな。この子は篠ノ之さんの妹で間違いないのかい？」

「……………」

また無視されたが、話したくないならそれでいい。

「篠ノ之（しののの）　箒（ほうき）です。よろしくお願いします。こっちはお姉ちゃんの篠ノ之　束です」

ぺこりと、自己紹介をして頭を下げる。

なんてことない仕草だが、まだ小さいのにこれだけ出来るということは育ちが良いんだろう。

「これはどうもご丁寧に。私は織斑　十秋。さっきまでここにいた彼女たちの兄だ。よろしく頼むよ」

「お兄さん……？」

「そう、兄だ。よく女性と見間違われるが、私は歴とした男性だからね」

猜疑の眼差しで見られたが、そこら辺はいちいち気にしていられない。

「それで、どうしてキミたちがここにいるんだい？　妹達に招待でもされたのかな？」

「ちーちゃんに呼ばれて、箒ちゃんもまーちゃんに呼ばれたらしいからお邪魔したんだよ」

「お姉ちゃんっ！」

これ以上私が彼女と接するのがイヤだったのか？

意図はどうであれ、うさ耳さんが私に発した第一声は、とてつもなく冷たい、抑揚のない言葉だった。

しかし嬉しいなぁ。思わず笑みがこぼれてしまうよ。

「……気持ち悪。どうして笑うの？」

その低いトーンで気持ち悪いと言われると傷付くぞ。

「いやぁ、今までずっと無視されていたからね。どんな理由でも、話しかけてもらえたことが嬉しかったんだ。それに千冬が家に友達を招待するのは初めてなんだよ。あれは人を見る目はあるからね。そんな妹が選んだ友達なら是非とも私も仲良くなっておきたいと思ったんだ」

「……今まで無視されていた相手にどうしてそんなにへらへらするの？」

「あれは見ると言ったろう？　キミには私を無視するだけのなにかがあったのだろうと思ってね。なに、心配しなくても詮索はしないさ。知られたくないことなんて誰にでもある」

私はべつにへらへらしているつもりはないんだがなぁ。
友好的な笑顔をしているつもりなのだが、他人からはそう見えるのか？
今度あのアホで実験してみるか。

「変なの」

「お姉ちゃん！　マドカのお兄さんにそんなこと言っちゃダメ！」

「いや、いいんだよ。昔からそう言われることは多くてね。実際自分でもそう思うから、そう思ってくれても構わない」

篠ノ之家もうちと同じで一番下の妹が一番しっかりしているという変な構図なんだろうか。
さっきから篠ノ之さんの発言に対して妹さんがしっかりと注意してるし。

「あーあ、なんか疲れちゃった」

「すいません、うちの姉が……」

「大丈夫大丈夫。なにか飲みものでも持ってくるよ。篠ノ之さんはコーヒーと緑茶と紅茶、どれがいい？」

ゴロンと転がる姉と謝る妹。
……どっちが姉か疑いたくなるな。

「……束」

「いや、うちにそんな銘柄のお茶はないよ？」

「わざとでしょ？　絶対わざとだよね！？」

「え？　な、なにが！？」

いきなり体を起こしてテーブル越しに迫られると怖いぞ、少しだけ。
しかしトーンが先程より高いから受け入れてもらえたのかな？

「束さんの名前だよ！　篠ノ之束ってさっき箒ちゃんが言ったのを聞いてたくせに！」

えっと……ああ、そういえばそんなことを言っていたな。
会話の流れ的にあそこは茶の銘柄のことだと思ったのだが、名前のことだったのか。

「ごめんごめん。しかし生徒のキミを名前で呼ぶのは些かまずい様な気がするのだが」

「今はべつにプライベートだからいいでしょ？　学校でも呼んでくれても構わないけどね」

「そんなものなのか？　まあ、そういうことならよろしく頼むよ、篠ノ之さん」

「今のも絶対わざとだ！　ニヤニヤしてるし絶対わざとだよ！　呼んでって言ったのに！」

なんかさっきとはテンションがまるで別人だな。
しかしこうやってギャンギャンと騒いでいるところを見ると千冬が心を許したのもわかる気がする。
笑顔に屈託がなくて、雰囲気も朗らかとしていて、自然にペースを持って行かれそうな感じ。
まあ、私のペースは渡さないし、私のペースからは逃さないけどね。

「ははははは、ごめんってば。ほら、飴あげるから」

「飴なんかいらないよ！」

「そうか。それなら――――」

「けちんぼ！」

どっちなんだよ、とかツッコミはいれたらいけない。
そういうお年頃なんだろう。
篠ノ之さんは私があげた飴をころころと口の中で転がし、ちょっぴり満足そうな顔をした。
その隣では妹さんが私を物欲しそうな顔で見てる。

「ほら、箒ちゃんもいるかい？」

「ありがとうございます！　ん～～～～！！」

ぐはっ……！！
飴を口の中に入れた瞬間にほっぺを手に当てて幸せそうな表情をする篠ノ之妹がかわいすぎる！
これは……マドカを凌ぐ勢いだ……。

……ん？　なんか篠ノ之さんがこっちを不機嫌そうに見てるんだが……。

「箒ちゃんだけ呼んだのに束さんのことは呼ばないなんて……」

「もう一ついるかい？　篠ノ之さん」

「いらないってば！　とっくんの意地悪！」

篠ノ之さんがぷくっとほっぺを膨らませて怒っているのはいいとして、今の聞き慣れない単語はなんだ？
会話の流れからして私のことなんだろうが……もしやここで茶の銘柄の指定か！？

「そんなお茶はないよ？」

「むぅ～！　なんでそうなっちゃうの！？　とっくんはとっくんのことだよ！　わざと意地悪するとっくんなんかキライ！」

「あっ、拗ねた」

「拗ねてないもん！」

ドカッと座ってほっぺを膨らませてそっぽを向いているのを拗ねていると言わずしてなんというんだろう。
年相応というか……幼すぎる印象があるな。

「束は子供だなぁ」

「子供じゃな……いま、名前呼んだ？」

「キミが呼んでくれと言ったんだろう？　なにをそんなに驚くことがあるんだ？」

口をポカンとあけるのは馬鹿っぽく見えるからやめた方が良いぞ。

「タイミングが卑怯だよ！　意地悪！」

「そんなこと言われたって……それで、束はなにがいいんだ？」

「何度も呼ばないでよ〜……。それとコーヒーのブラック」

「はいよ」

「（なんか……ちーちゃんに名前を呼ばれた時とは違うくすぐったさだ……）」

篠ノ之さん改め束が何故かその場にへたり込んでこっちを見て来たが、それは気にせずに私はキッチンへと向かった。

「お姉ちゃん楽しそうだね」

「そうかな？　箒ちゃんの方が楽しそうだよ？」

「うんっ！　なんか優しくて、本当にお兄さんみたいだから。私にお兄ちゃんがいたらあんな感じだったのかなぁ」

「お兄ちゃん……か。そうだ、箒ちゃん。とっくんが箒ちゃんのお兄ちゃんになる方法が一つだけあるよ！」

「本当！？」

「お姉ちゃんは嘘吐かないよ！　そのうちとっくんを箒ちゃんのお兄ちゃんにして見せるからね！」

「うんっ！　約束だよ！」

だから、篠ノ之姉妹がそんな会話をしていたことは気付かない――――わけあるかぁ！

キッチンとリビングは繋がってるし、あんな大声で話されたら筒抜けだっつの。

「こら、無責任な約束はするもんじゃないぞ。それに束はまだ子供だろう。そういうのはもう少し大人になってから言いなさい」

「むむむっ！　束さんはもう大人だよ！　体だってこんなに色っぽいんだから！」

「はいはい、わかったから。束は大人だよ」

「む〜。嬉しくない……」

確かに束の体の発育はかなり良い方だろうが、私の近くにはそれよりも強大な武器を携えるアホがいるから、それくらいじゃあ動揺せんよ。

それより束は本当に表情が豊かだな。拗ねてばっかりだけど。

「ほら、箒ちゃん。ジュース」

「あっ、いただきます。ゴキュゴキュ……」

オレンジジュースの入ったコップを渡すと嬉しそうな表情で一心不乱に飲み始める箒ちゃんの破壊力高すぎないか？

「まあ、コーヒー飲んで落ちつきな」

「とっくんはホントに意地悪だよね。さっきもそうだけど上げて落とすのが上手っていうか、人の扱いに慣れてるよ」

「これでも教師だからね。人がどうすれば喜ぶかもわかるし、どうすれば傷付くかもわかる。そのせいで千冬はコミュニケーションが苦手になったから、あまり誇れる様なものでもないけどさ」

鈍感といわれるが、人の心にはかなり敏感な方だと思う。ただ恋愛には疎いだけだろう。

「なんでそれでちーちゃんが？」

「あれは昔からずっと私にべったりで、頼りきりだった――――と言えばわかるかな？」

「そっか。ちーちゃんの友達を作ったのは全部とっくんで、自分で作った友達はあんまりいないんだ」

ほう、随分と鋭いな。

「だから束は千冬と仲良くやってくれ」

「もちろんだよ。将来義妹になるんだから仲良くしないとね」

「……まあ、よろしく頼むよ」

これ以上なに言っても無駄だろうし、所詮は子供の戯言だから、すぐに飽きるだろう。

それから私たち三人は談笑をしながら千冬たちの帰りを待った。

第八話

「お帰り、二人とも。遅かったけど大丈夫だったか？」

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。スーパーの中で姉さんが迷子――――むぐっ！」

「わ、私はべつにそんなことはないからな！？　それより……なんだ。束とは随分と親睦を深められたようだな」

もう既に日は沈んだ宵の七時に二人は袋を抱えて帰って来た。マドカの言葉に焦る千冬の様子を見るからにマドカの言葉は本当なんだろうが、通い慣れたスーパーで迷子になれるってある意味すごいな。

「まあ、よくわからんが懐かれた」

「とっくんとっくん！　もっとお話しよ～！」

「ちょっと待ってくれ」

話というのはちょっとした機械工学のことだ。
私も飛び級で大学を出るくらいだから頭はいいんだが、束は私の比じゃないくらいに頭が良い。
それでも知らない知識というものはあるもので、それを教え始めたら目がキラキラし始めて、さっきからずっと離してくれないんだ。

「まさかあの束が一日足らずで心を許すとはな」
「そうなんですか？　私のときは会った瞬間に抱きつかれましたけど」
「あれは箒の友達だからだろう。言っては悪いが、あれは人として認識しなければ口を開くことすらないからな」
それはすごいな。
つまり私は初対面では人として認識されていなかった、今でもほとんどの人が人として認識されていないということか。
そんな狭い世界で生きてたら、あんなこと言い出すのも至極当然なのかね。
「それよりお前たち、お兄ちゃんになにも言わずに出ていったのはどういうことかな？　お兄ちゃんビックリしちゃったなぁ。帰って来たら知らない子がいるんだもん。焦っちゃうよねぇ、そんなことがあったら」
ガッシリと二人の頭を掴み、ハイライトの消えたであろう瞳で二人に笑いかける。
「こ、これは姉さんの思いつきで――――」
「ひ、人のせいにするな！　マドカだってノリノリだってではないか！」
「それは姉さんが楽しそうだっていうから！」
ギリギリッ……

「責任転嫁より先にすることがあるんじゃないのかい？」

「「すいませんでした……」」

二人とも反省して頭を下げたから、今回は大目に見てこれくらいで許そうかな。

叱るのは心が痛むが、悪いことをすれば怒られるのなんて当然のことなんだし、見逃すわけにはいかないだろう？

甘やかしすぎるのは二人のためにもならないからね。

「わかればいいんだよ、わかれば。以後勝手にそういうことをしないように。わかったな？」

「「わかりました……」」

「さて、それじゃあ私は晩御飯を作ってくるから、お前たちはさきに風呂にでも入って待ってなさい」

マドカと千冬からスーパーの袋を受け取り、私はキッチンへと赴く。

「とっくん！　まだお話は終わってないよ！」

「わかったから。料理しながら聞くからキッチンに来い。それと箒ちゃんはごめんな。もうちょっと御本読んで待っててくれるか？」

「はい、お兄ちゃん」

「「お兄ちゃん？」」

うわぁ、厄介なことを聞かれたな。
いずれは聞かれるだろうと思っていたが、こんなに早く来るとは。
朿が変なことを言い始めてから何故かこうやって呼ぶようになったから、私は何度も直させようとしたよ？
それでも無理だったんだから仕方ないじゃないか。

「どういうことだ？」

「どうして箒にそんな呼び方をさせるのですか？　妹なら二人で十分ではないのですか？」

二人の背後に般若の様なものが見えるが気のせいだろう。

「後で話すからさっさと入って来い」

「絶対だからな？」

「逃げないでくださいね？」

「だからそう言っているだろう」

どうしてそんなにしつこいんだ。
マドカはともかく、千冬は私が同意のうえでの約束を破ったことなど一度だってないことはわかっているくせに。
渋々バスルームへ向かう二人の背中に溜め息をつき、私はようやく朿の待つキッチンに辿り着いた。
そこで買い物袋の中を初めて確認したのだが、確かに必要のないものは何一つ買っていなかった。
このホールケーキも篠ノ之姉妹を歓迎するものなんだろうし、こっちのジュースや紅茶もそうに違いない

友達想いなのか、自分の欲を満たしたいのかは聞かないが、前者ということにしておこう。

「束は料理とか……出来ないな」

頭にうさ耳付けてる様なヤツが料理なんて出来るわけない。

「むっ！　人を見た目で判断するのはよくないよ！　束さんの料理の腕前は超一流なんだから！　そもそも出来ないことがない完璧超人なんだよ！」

「そうか、それはよかった」

「む〜〜〜！　信じてないね！？　生徒を信じるのが教師ってものなんじゃないの！？」

「残念ながら今はプライベートだと、さっき自分で言っていたじゃないか」

ほっぺを膨らませてプリプリと怒る束はとても微笑ましいのだが、声が高いから耳元で騒がれるとハウリングが起きそうになる。
まあ、それも割と心地良いんだけどな。
……言っておくがMではないぞ？

「人の揚足ばかり取るとっくんは好きじゃない！」

「取られる方にも責任があるだろう。それより束。料理が出来るのなら手伝ってくれ。あんまり待たせるわけにはいかないからな」

人の家に来ていつまでも一人で本を読んでいるというのは箒ちゃん

にとって苦痛だろうしな。

「ヤダ。だってとっくんは束さんを虐めるもん」

「あっ、また拗ねた」

「拗ねてない！」

そうやってほっぺを膨らませて意固地になって否定することを拗ねているというんだよ。

「ふふふっ、子供みたいで束はかわいいなぁ」

「そんな褒められ方されても嬉しくない」

べつに褒めたつもりはなく、ただたんに素直な感想を述べただけなんだが、束はそれでも御立腹なようだ。
この年頃の女の子は扱いが難しいよなぁ。向こうの実習でも苦労させられたよ。

「仕方ない。それなら一人で作ろう」

手伝いたくないと言っている人に無理強いは出来ないからな。
豆腐とひき肉があるし、小学生が好きそうなハンバーグとかで良いだろう。

「絶対手伝わないもん」

「わかってるって。そこに座って待っててくれ」

そこからはずっとそんな会話をしながら玉ねぎを炒めたり、いろいろと混ぜてタネを捏ねたりした。

束がこっちをチラチラと見てきているが、どうしたんだろう。

「…………………」

「…………………」

パンパンパンパン……

「むぅ！　束さんもやる！」

「ふふふっ、最初からそう言えば良いのに」

私がハンバーグのタネの空気を抜いていると、ムキになりながら束が私の隣に陣取ってから同じようにやり始めた。

それが子供っぽいということには気付いてないんだろうなぁ。

「とっくんが意地悪するからいけないんだよ！　束さんは傷付きやすいんだから丁寧に扱ってよ！　割れ物注意なんだから！」

「はいはい。わかったわかった」

「む～！　そういう態度取ると束さんはまたいじけちゃうから！」

「やっぱりさっきまでいじけてたんだな」

「うっ……。とっくんなんかキライだよ」

自分で被爆しに行ったのにそれを私のせいにするのはお門違いだろ

う。
まあ、ニヤニヤしながら東を弄る私にも責任はあると思うけど。
「私は東のことは嫌いじゃないぞ？　むしろ好きだ。千冬の友達だからな」
「最後の一言が余計だよね。東さんだってとっくんのことが嫌いだったら仲良くなんかしないもん」
「私も本当に嫌われていると思ったら意地悪なんてしないさ」
「意図的にやってたんだね」
そんなにジト目で見るのはやめてくれよ。
いくら生徒とはいえ歳の近い女子にそういう目で見られるのは好きじゃないんだ。
「仕方ないだろう？　東は虐めたくなるんだよ、なんとなく」
「それってあれだね！？　男の子が好きな女の子を虐めたくなるヤツ！　とっくんも素直じゃないなぁ～」
そんなにニヤニヤして変な解釈をしないでくれ。
私は子供にちょっかいを出すのが好きなだけだ。
「反動形成なんかじゃないからな」
「にゃふふ～。わかってるよ。とっくんの気持ちは受け取ったから！」

「はあ……」

元気になってくれたことはいいんだが、変な勘違いされちまったなぁ。

そんなことを思いながら、私と束は夕食を作り続けた。

第九話

「なあ、マドカ」
「言わなくてもわかっていますよ、姉さん」
「そうか……。お前ならあれをどう形容する？」
「そうですね。新婚ほやほやの馬鹿夫婦、といったところでしょうか」
風呂から上がった二人が見たものは、キッチンでイチャイチャしている（ように見える）束と十秋だ。
仲睦まじく、笑顔で話しながら料理をする二人は、まさしくマドカの言うそれ。
それを見つけた二人はギリギリと歯を鳴らし、ぐっと拳を握りつけた。
「すいません。自分で言って無性に腹が立ちました」
「問題ない。私もそう見えたからな。そしてその単語が頭を過ぎった瞬間に自分を殺したくなった」
「しかし、まあ、こう言ってはなんですが、あれは私たちに取る態度と大差ないので安心と言えば安心です」
十秋が束に向けている笑顔は、恋愛感情など微塵も含まれておらず、

保護者が子供に向けるそれと同義だ。
それはマドカの言う様に安心出来ることでもあり、不安になることでもあり、落胆することでもある。
束に恋愛感情は向けられていないという安心。
たった数時間で自分たちの同位置まで束が上り詰めてきているという不安。
同時に自分たちも恋愛対象外であるということに落胆する。

「はあ……。しかし、友人として束に友が増えるということは嬉しいことだな」

「箒も兄さんのことを兄の様に――――あっ」

「そうだ！　すっかりと忘れていたがそのことについて言及しなくてはならん」

「はい。ついでに束さんとの関係もしっかりと」

ぐふふふふ、と二人は薄気味悪い笑みを漏らす。
十秋を恋愛対象に据えるこの二人には兄妹という強大な壁は存在しないものと同義である。

「（マドカと千冬さんが壊れてる……！）」

決して口には出さないが、箒はそれを見て少しだけ二人からそっと距離を置いた。

「「「「…………」」」」

すまん。やはりここは私の家ではない気がして来た。
千冬たちが風呂からあがり、ちょうど夕食も完成して、席に着いて合掌し、これからみんなで食べようということろなんだが、約二名が私を射殺す様な視線で見てきているのですごくいたたまれない。
ああ、お家に帰りたい……が、ここが家なので私に帰る場所は残されていない。

「モキュモキュ……」

幸せそうに夕食を堪能している箒ちゃんがとても羨ましい。
彼女にはこの殺伐とした空気が理解できてないいんだろうなぁ。
それに比べて姉の方は――

「とっくんが作った特製ソースが美味しいよ！　とっくんも早く束さん特製ソースを食べてみて！　さぁ！」

たぶん私が二人から睨まれているのを理解しながらやってきている。
性質が悪すぎるだろう。これはなんていう修羅場ですか？

「……。二人とも、言いたいことがあったら言ったらどうだ？　いつまでもそうやって睨まれるだけでは伝わらないぞ？」

とりあえず手で束を制して、眼光を飛ばしてくる二人を真面目な表情で見つめる。
その瞬間に顔を赤くして視線を逸らされたんだが……そんなにおかしいのか？

「コホン！　入浴の前にも言った気がするが、どうして箒に『お兄ちゃん』と呼ばせているのだ？」
「呼ばせているんじゃない。勝手に呼ばれるんだ」
「それでは質問を変えましょう。どうしてそう呼ばれるようになったのです？　突拍子もなく兄さんのことを『お兄ちゃん』と呼ぶほど箒も節操がないとは思えませんので」
二人の妹に『お兄ちゃん』と呼ばれるのはすごく心地良い！　――ではなくて。
二人とも真面目に聞いて来ているんだから真面目に答えなければ。
「話すと長くなるんだが――」
「束さんととっくんが結婚するっていうことだよ！」
「「ぶふーっ！」」
あっ、おい、汚いからお茶を吐くんじゃないよ。
「端折り過ぎだ。というか私はまだそれに了承したわけではない」
本当に要点だけ引きぬけばそうなるのだが、それではただ誤解を生じるだけってことがわからないのか。
いや、わかってやってるのか。
「ええ～？　だって束さんはもうとっくんのお嫁さんだよ？」
「どういうことだ十秋兄！」

「家族に相談もなしでそんなことをするなんて許せません！　いえ、相談しても許しません！」

マドカの言い分は随分と理不尽だな。
束もわけがわからないみたいな表情をしないでくれ。
私の方がわけがわからないよ。

「とりあえず二人とも落ちつけ」

「これが落ちついていられるか！　兄の人生の分岐点だぞ！？」

「これは束が勝手に言い出した事だから、私はまだなんとも思っていないと言っているだろう。それに手の掛かる愚妹が独り立ちするまではどこにも行かんさ」

この二人を置いて誰かと結ばれるなど、兄としてやってはならないことだろう。
早くそうした方が妹たちも安心すると思うが、やっぱりまだ妹との家族愛を育む方が性に合ってる。

「今の言葉本当か？」

「おう、嘘は言わないからな」

「よし、マドカ」

「はい、姉さん」

何故かは知らんが、二人の瞳がキラリと光った気がする。

イヤな予感しかしないんだが……。

「「それなら私たちはずっと手の掛かる愚妹でいよう（いましょう）」」

目の前に二人、とてつもないアホがいた。
コイツらには私の幸せなどどうでもいいのか？
ヒドイ姉妹を持ってしまったものだな。

「あの……たくさんの孫に囲まれながら安らかに眠るという私の夢を叶えさせてはくれないのか？」

これは人間なら誰しも望むことだろう？
老いた妻――――これが誰かは知らんが――――の手を握りながら二人で一緒に天国に行けたら、とかも良いよな。

「い、いきなりそんなことを言われても……！」

「そ、そうですよ、兄さん。私はまだ小学生なのですから……。コホン！　とりあえず子供は何人欲しいか聞いておきましょうか……」

話が飛躍しているのはお前たちの脳内限定でのことだと思うのだが……。
そんなに照れながら言われても、私は妹に変な気は起こさんよ。

「大丈夫だよとっくん！　その夢は束さんが叶えてあげるから！」

「誰が束になど十秋兄をやるか！　私が愚妹でいる限り十秋兄は誰のところにも行かないと言っているだろう！」

「ちーちゃん。いつまでもそんな子供みたいなことを言ってとっくんに迷惑掛けちゃダメだよ？」

「うっ……！　まさか束に正論を説かれる日が来るとは……」

それくらい誰でもわかりそうな気はするが……。

「それなら私は小学生だからセーフですね。兄さん、ずっとそばにいてくださいね？」

「確かにお前たちがずっとそばにいてくれるというのは嬉しいよ」

「本当か！？」
「本当ですか！？」
「とっくん！　あんまり甘やかしたらいけないんだよ！」

食いついて来てくるるのは有り難いが、そんなに身を乗り出すな。
ほら、箒ちゃんが迷惑そうな顔――――せずに一心不乱にハンバーグ食べてるからそれについてはいいか。

「だけど、それよりも立派な姿になって巣立つ妹を見てみたいという気持ちの方が大きいかな。愚妹じゃなくて、兄として胸を張れる様な立派な妹になってほしいよ」

いつも手を焼かせる妹でもいいとは思うけど、それは私の我が儘だ。
本当に妹のためを思うのなら、そう思ってやるのが兄の務めというものだろう。
それと、独り立ちする妹を複雑な心境で見送る親心というものも体験してみたいっていうのもある。

「それなら立派な妹になってずっと十秋兄を私のそばに置いてやろう！　感謝することだな！」

「そうです！　兄さんが頼りっきりになるくらいの妹になって兄さんとずっと一緒にいますから！」

なかなか嬉しいことを言ってくれる様になったじゃないか、この二人も。

その言葉だけで兄として誇らしく思うよ。

「ふふっ、そりゃどうも。千冬もマドカも頑張れよ」

そういうと二人とも花の咲いた様な笑顔になり、腹が空いていたのかようやく食事を開始し始めた。

「む〜！　ちーちゃんとまーちゃんばっかりずるい！　束さんだって意地悪ばっかりされないで甘やかされたい！」

「まあ、気が向いたらな」

「むむむっ！　とっくんのけちんぼ！」

「ほら、これ食べて落ちつけよ」

騒ぐ束の口の中にハンバーグを一切れ放り投げ、私も食事を開始した。

言っておくが『はいあーん』ではなく、本当に放り投げただけだから勘違いはしないでくれ。

「ものでで釣ろうたってそうはいかないからね！」

とか言いつつも幸せそうな表情で噛み締めてるのはどこのどいつだよ。

第十話

「箒ちゃんはよく食べるね」
「あっ、す、すいません……」
「ああ、いや、謝ることじゃないよ。よく食べるのはいいことだと思うし、キレイに食べてもらえると作った甲斐があるからね」
夕食を終えた後、二人で洗い物をしながら楽しく会話を弾ませる。
いつもはマドカが手伝ってくれるんだが、今日は箒ちゃんが買って出てくれたから箒ちゃんに手伝ってもらっているんだよ。
なんでもご馳走になりながら何もしないのはイヤなんだとか。
本当によく出来た子だよなぁ。

「そうですか？」

「うん。健康的で素敵な女の子だと私は思うよ」
不安げに訊ねてくる箒ちゃんに笑顔を向けてそう言うと嬉しそうに照れて俯かれた。
まあ、身近な異性にそういうことを言われたら当然か。
「それにその髪型も似合ってると思うよ。お姉ちゃんがやってくれたのかい？」
「はい。お姉ちゃんがやってくれたので私のお気に入りです。あの

……その……か、かわいいですか？」

「ふふっ、好きな男の子でもいるのかな？」

「そ、そんなんじゃないですっ！」

即答で否定されたから本当にいないんだろうな。
でもそうやって言われるとちょっとからかいたくなるよね。

「好きな子が一人くらいいてもおかしくなんかないんだから恥ずかしがることじゃないよ。それで、その子はカッコイイの？」

「だから違いますっ！　もう、あまりからかわないでくださいよ……」

「ふふっ、箒ちゃんはかわいいなぁ」

「う～～～……」

まったく、小学生は最高だぜ！
――――違う。今のは私の本心ではなくどこかから受信した電波だ。
まあ、悔しそうに、それでも私の言葉に嬉しそうに俯く箒ちゃんはかわいいとは思うけど。

「からかってばっかりのお兄ちゃんはキライです……」

「それはお姉ちゃんにも言われたたよ。意地悪ばっかりしないでって」

嫌われるのはイヤなんだが、それでもやめられないことってあるだろ？

私が人をからかうのは癖みたいなものなんだよ。
「あの、お姉ちゃんのことはあんまり虐めないでくださいね？　お姉ちゃんは傷付きやすいので」
「ふふっ、それもお姉ちゃんから言われたよ。箒ちゃんは本当にお姉ちゃんのことが好きなんだね」
「はい！　大好きです！　自慢のお姉ちゃんですから！」
このいい子にここまで言わせるってことは、本当に良い姉なんだろう。
私はまだその片鱗すら見ていないが。
「あっ、でも……お、おにいちゃ――――」
「とっくんとっくん！　束さんたちは今日お泊りすることになったから！」
箒ちゃんがなにかを言おうとしたときに割って入ってくるなよ。空気読め。
「はぁ！？　明日の学校はどうするつもりなんだよ！」
「やったね箒ちゃん！　友達の家に初めてお泊りできるよ！」
「う、うんっ！」
「私の発言は無視か……」

おい、箏ちゃんはお前の思いつきでめちゃくちゃ戸惑ってるじゃないか。
しかし、そんな楽しそうな顔されたら否定しようとしていた私が馬鹿みたいだ。
小学生にとってはそういうのは夢みたいなものだろうし、束の性格を考えたら束も初めてだからウキウキしてるんだろう。
「それより着替えはどうするんだ？」
「大丈夫！　そのつもりで来てたからばっちりだよ！　ほら、下着だって――」
「見せなくていい」
この少女には恥じらいというものがないのか。
異性の友人の前で自分の下着を晒す女子高生がどこの世界にいるんだよ。
「ええ～？　つけてないからセーフだよ。それともつけてた方が良い？」
「どっちもアウトだ。もっと自分を大切にしろ」
つけてるとかつけてないとかそういう問題じゃないんだよ。
見せるということ自体が問題なんだ。
「してるよ？　とっくんだから見せてるんだよ」
「はいはい。わかったから小学生の前では自重しような」

見てみろ。さっきから箒ちゃんが恥ずかしそうに俯いてるじゃないか。

「わ、私は席を外しますね……？」

「そんな変な気遣いはしなくていいから。ほら、二人とも風呂にでも落ちついて来なさい」

「覗いちゃダメだからね？」

「色気もない子供(ガキ)の入浴を覗く方が無理がある」

プライベートとはいえ、教師と生徒という関係は揺るがない。手を出せば法律的にも問題があるし、そもそも生徒からセックスアピールを感じる様な変態じゃないからな。

「む〜！　束さんは大人だってば！　脱いだらすごいんだから！」

「わ、私ももう子供じゃありませんっ！　ぬ、脱いだらすごいんですからっ！」

束はブラウスとプリーツスカートでラインが見えるからそうだとは思うが、なぜ箒ちゃんまでそんなアピールをするんだ？
小学生の頃から脱いだらすごいとか怖いぞ。
姉に張り合ったつもりだとわかっているからかわいらしいと思うけどさ。

「はいはい、大人大人。立派な大人だから二人仲良く風呂に入りなさい」

「箏ちゃんいこっ！　とっくんはなんにもわかっちゃいないよ！」
「ぬ、脱いだらすごいんですからっ！」
箏ちゃんは引けなくなって意地で言ってるんだろうな。
なにはともあれ、束が箏ちゃんを引っ張って行ってくれたし、私は皿洗いを再開しようかね。
「――十秋兄」
「ん？　どうした？」
「その……すまない。束は言い出したら聞かなくて……」
なにか申し訳なさそうな感じでキッチンに来たかと思えばそんなことかよ。
「気にすんな。それより布団をどうするかだよなぁ。あの人たちのは全部捨てちまったし、三セットしかないんだっけ？」
「あ、ああ。でも本当にいいのか？　迷惑ではないのか？」
コイツは人の話を聞く気がないんだろうか。
今さっき『気にするな』って言ったのに、気にしまくりじゃないか。
「お前の初めて連れて来た友達が迷惑なわけあるかよ。というか迷惑だったら追いだしてるから。いくらお前の友達でも人に迷惑を掛ける様なヤツはうちに置かん」
そもそもそんなヤツなら千冬の友達にはなれないだろ。

「そうか……。うん、そうだな。布団は三つ繋げて全員で川の字――」

「却下だ。私の貞操のことを考えるとそれだけはない」

「なっ！？　いくら私でも許可なしにそんなことはしない！　少しは信用したらどうだ！？」

「いや、私は束のことを言っているつもりなんだが……。どうして千冬が私の貞操を脅かすんだ？」

千冬は妹だし、昔からそうやって寝たこともあるから信用しているぞ。
そもそも妹を信用しない兄がどこの世界にいようか。

「うっ！　い、今のは違うぞ！？　私が十秋兄のことをそういう風に思っているとか、そういうのでは断じてないからな！？　勘違いはしないでほしい！」

「お、おう。それくらいはわかってるけど……」

「だから勘違いをするなと言っているだろう！？」

「いや、私はわかっていると言っているじゃないか。一度落ちついたらどうだ？」

目がぐるぐると蚊取り線香みたいになってるけど大丈夫なのか？
とにかくそんな千冬を椅子に座らせ、冷たい麦茶を出してやる。

「ふぅ……。今のは本心ではないからな？」

「何度も念を押さなくてもわかってるって言ってるだろ。それより、布団はどうするんだ？　千冬と束が一組ずつ使うとすると残りは一組しか余らないぞ。それに――」

「……そ、それなら私と十秋兄が……」

「大人が一組の布団に二人で寝るのは無理だからな」

バンッ！

「うおっ？　ど、どうした？」

ぶつぶつと喋っているからスルーして話を続けたのがまずかったのか？
それでもテーブルを叩くなんて暴挙はあまりしてほしくないのだが。

「す、すまない……。コホン。それならどうするのだ？」

「うーん。私と子供二人の三人で一つの布団を使って寝る、というのが妥当だろうな」

残念ながらうちにはソファがないからそこで寝ようにも寝られないんだよ。
子供二人くらいなら腹の上に乗せても横にいてもなんの邪魔にもならないからな。

「それはマドカを甘やかすことになるのではないか？」

「いや、窮屈な思いをさせるんだし、そうはならんだろう」

「むぅ……。それならこういうのはどうだ？」

そこで千冬が提案した方法は、至極不可解なものであったが、それもありだと思って私は了承した。

その方法とは――――

「それじゃあ寝ようか、箒ちゃん」

「はい、お兄ちゃん。おやすみなさい」

箒ちゃんと私が二人で一つの布団を使い、あちらは三人で二つの布団を使うというものだ。

どうしてこうなった？

「……。本当に良いのかい？」

「なにがですか？」

いや、なんのことかわからないというような顔をされても……。

わかってないならそれでいいんだけどさ。

「やっぱりなんでもない。ほら、もっとこっちおいで」

「お兄ちゃんは温かいです……」

新しい妹が出来た様な気分だな。

私にそっと寄り添って目を瞑る箒ちゃんを見てたら私も眠くなって来たよ。

「おやすみ」

チュッ……

つい出来心で額に唇を落とした私は悪くないと思う。
いや、だって額だし、なんかもう家族みたいだし、セーフでしょ？
……その瞬間に箒ちゃんが顔を赤くしたとか、そういうのもあまり気にしたらいけない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9497w/

ＩＳ　～黒一点～

2011年9月28日08時08分発行